

こぶしの花
大日方妙子



こぶしの花 大日方妙子

こぶしの花 はな

定価 九八〇円

著者——大日方妙子 おほひなたたえこ

遠藤 誉 えんどう ぼな

河野浩美 こうの ひろみ

編集人——佐野 寧

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇

大阪市北区野崎町八の一〇 千五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一 千八〇二

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——ナショナル製本

第一刷——昭和五十八年十一月三十日

第三刷——昭和五十八年十二月二十九日

0095—703600—8715

© 1983, Yomiuri Shimbun-sha.

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

日本音楽著作権協会（出）許諾番号第8363501—302号

第四回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞入賞作品集

こぶしの花 目次

優秀賞 こぶしの花

大日方妙子 5

優秀賞 不条理のかなた

遠藤 誉 79

入選 命一コマ

河野 浩美 147

選後評

野上 龍雄 213

選考経過

217

装丁
灘本唯人

こぶしの花

優秀賞

こぶしの花

大日方妙子
おおひなただえこ

おおひなた たえこ 大正十四年四月十六日、旧満州大連（現、旅大市）生まれ。小学校六年生からハルビンへ転居。ハルビン富士高女卒業。昭和二十二年十一月、日本へ引き揚げて来た。主婦。

現住所 千葉県市川市平田二の十八の十二

ひとし

均は二十一歳で終わる生命と、産まれた時から定められていたのでしょうか。

臍の緒を首とお腹に巻いて産まれ、数分後にやっと産声をあげました。初めての子供ですし、大切に、若かった私どもの扱いは、危なっかしくも育ってゆきました。

満一歳になる少し前にハシカにかかり、離乳も歩くのも、すっかり遅れてしまい、その上、肺門リンパセン炎を起こして、ストマイ・パス・ヒドラジッド等、あちこちの病院回りをして、薬を飲みました。二歳を過ぎた時に、やっともう大丈夫との許しを得て、海へ連れて行けるようになり、喜び合ったのでした。でも一年に一度のレントゲン検査は必要で、小さい彼が、胸の写真をとる台に立つと、上手に顎をあげて、その格好をしますので、技師先生にほめられます。子供は得意な顔をしますが、私は複雑な気持ちでした。元氣になったとはいえ、一か月に一度は高熱を出して医者通いです。その高熱のために中耳炎を起こし、熱が下がると耳鼻科通いでした。風邪をひきやすく、すぐヘントウセンがはれるからです。度び重なり、とうとう右耳の鼓膜にあい

た小さな穴は塞がらなくなりました。四歳ぐらいの時に画いた絵ですが、大きな鯨のお腹の中に、さまざまな色の小さな丸い玉が並べてあるので、何か判らず聞きますと、菓の玉だと言うのです。何心もなく画いた幼い絵は私の胸をつき、黙って見つめるだけでした。

小学生になり、プールで泳ぐようになった時は、本当に心配で、水が入らないようにワセリンを塗り、綿をつめて絶えず注意しなくてはなりません。市販の耳栓では駄目なのです。小学三年生ぐらいまでは痩せておりました均も、四年生から太り出し、みるみる元気に育ってゆき、医者との縁はだんだん遠くなりました。そして六年生の時には健康優良児の第一候補に選ばれたほでした。右耳の小さな穴のために失格したのは残念でしたが、これほど丈夫になってすっかり安心しました。

中学生になってからはほとんど病気をしません。ブラスバンドに入り、フルートを受け持ちまして、運動会では花形です。中学三年の夏に市川へ越しましたが、遠くなって大変なのに転校は考えもせず、都立小山台高校を目指しておりました。この年から学校群が始まったのですが、夏休みが終わる頃にやっとそれが確定するという不安定な受験体制の中です。希望通りに入学できました時は、喜びに満ちておりました。朝は七時前に家を出なくては間に合いませんが、いつもすれすれだと言いながらも休まずに通いました。二年生の終わりに、どうしてもフルートをやりたいと言いました。受験の前、都立に入ったら習わせてあげる約束をしておりましたので、学校の近くの先生を紹介していただき、週一度は通っておりましたが、フルートで身を立てると言うので、主人と二人で困ってしまいました。音楽で身を立てるきびしさをどんなに説明しても

聞きません。その上、文科系と理科系に三年から別れますのに、理科系へいくと言うのです。勉強が大変でも作文の苦手な彼は、レポートなど書くよりよいと言うのです。担任の先生も不思議に思われたようです。

「僕は趣味で物理をやりたいのだ」

といつも言っておりました。

ちょうどその折、主人の友だちにフルートの先生がいらして相談しますと、それほど好きならやらせるべきだとの助言があり、彼は好きな道を進むことになりました。いつもオーケストラのスコアを持って歩き、暇があれば音符を追っているのです。文庫本の大きさですから、それはそれは小さなお玉じゃくしが並んでいます。とうとう音大を受けることにしました。今までは理工科へ進むつもりでしたのに、高校三年から急に音楽に変えたのですから、学校の勉強とともに、フルートのレッスン・聴音と、秋からはピアノと歌のレッスンなどで、杉並へ仙川へ辻堂へ、それに流山が加わり、日曜もなく通うのです。家にいる時は、フルートの練習です。こんなことになるなら、最初から音楽を専攻する高校へ行かせればよかった……。音楽で身を立てることに反対していた親の責任を思います。憑かれた人のように彼は、そのハードな毎日をこなしてゆきました。

「休んだら？」

と言っても、中学から健康に自信を持っていた均は、休めるものかと怖い顔をして頑張るのです。あの時に喧嘩をしても休ませなくてはいけなかったーと今、私は自分を責めるばかりで

す。何と愚かな母親であつたでしょう。このような恐ろしい病氣があるとも知らず、息子の健康を私もまた信じておりました。一年後の発病が全部ではなくても、そこに原因があつたのではないかと思います。主人が知り合ひの医者に言われました。

「この病氣は発見が早いからよくなるとか、遅いからいけないとかいうことでなく、原因が判らないのだから誰が悪いのでもない。十万人並んだ人々の上に小石を投げて当たつたような災難なのだ」

と。きつと半分は慰めの言葉であつたのでしょう。リンパセンのガンにかつたのは、運が悪く、いとしか言ひようがないのでしょうか。高熱を出して急性肺炎でも起こしてくれたなら、彼も驚き休んだでしょうし、全快することができたでしょうに。その病氣はいつの間にか異なつた細胞を増やして、照射で叩いても制ガン剤で押さえても着実に彼の体を外側から侵していたのです。何もかも失つた今、こんな事を言つても仕方のないことです。彼は限られた短い生命を無意識の内に知つていたのでしょいか、

「時間が足りない。一日三十六時間欲しいよ」

と言つておりました。

人生、五、六十年間にするのを二十一年に縮めてしようと思つたのでしょうか。人間は偶然が重なつて生きてゆくもので、その偶然は生まれた時から定まつてゐるのではないかと思われ

限られた命

十七歳の暮れでした。

「母ちゃん、こんなものができているよ。何だろう？ 動くのだ」

指でつつくと皮膚の下で位置を変えるのです。胸のちょうど真ん中です。初めは鶉うすの卵ぐらいでした。

「病院へ行って来なさいよ。学校の帰りに寄れるではないの？」

ただ首をひねるばかりで無知な母親は、それがリンパセンの腫瘍であることを知らず、簡単に言いました。でも彼は、勉強にレッスンに忙しくて時間がないと言います。咳をよくしてしました。

「痛くも痒くもないんだよ。風邪が治らないなあ」

「だから休みなさいと言っているのに」

「だってあと二か月だよ。すんだらゆっくり休むよ。それまでだからやらなくては」

と言う彼の言葉に、私は黙ってしまふのでした。

三月に試験が終わってから、やっと彼は、二歳の時から見ていただいている医院へ行きました。その後、N大外科へ主人が連れてゆきましたが、胸のはピンポン玉の大きさになり、左肩にまた、小さいのがありました。それなのにまだ楽観しておりました親は、無知か馬鹿か、頭を叩き

のめしても足りません。通院で肩を取りました。その日にフルートのレッスンがあるから病院の帰りに行くと言います。かなりつらそうなのに、五反田だしK先生のレッスンだから絶対行くと、鋭い目で私を睨み据えて言うのです。やる事をし終えないと落ち着けない彼です。

「無理をしないで帰って来て」

と頼んで送り出し、夕方帰ってからやっと横になってくれました。それが四月初めです。

N大では、入院してから中央の瘤を取ると言われました。取れば治るのだと私どもも彼も信じておりました。入院して一週間余りは、検査ばかりで苛々して過ごした後に、やっと手術をされました。

「かなり大きくて、すっかり取ったつもりですが、今度は傷がちよつと残ります」

男だから胸の傷ぐらいいいな、と慰め合ったのですが、後で考えると、何もメスを入れて取る事はなかったのです。標本を取られました。傷跡は斜めに無惨に残り、後々まで、照射の後の痒みとともに、彼を苦しめたのでした。

三週間たつても検査しているとか、まだ判らないとか、はっきりした返事が貰えず、彼とともに、また苛々のし通しでした。慰めたり落ち着かせたりする私も、これで退院すれば治るのだと信じていたのですから、いま思うと自分が腹立たしくなりません。

主人が、ともかく入院代が高くて払えないことを理由に、退院させて貰うと担当医に会いにきました。事実、後で少し戻ってくるとはいえ、十日目ごとの請求書は私どもには大変でした。その時に言われた医者言葉、何日か主人は独りで抱えていたのです。

「息子さんはホジキン氏病。生命は一年か一年半です」

その時の主人の驚きと苦しさは、言語に絶するものであったでしょう。そのままお茶の水から丸の内まで、宙を踏むように、夢中で行き、確めたそうです。主人の小さい時から知り合いのその方はおっしゃいました。

「気の毒だけれど、これは事実なのだ！」

私に何と言うか、主人は思い悩んだようです。明るく晴れた四月のある日、二階の部屋へ改めて私を呼ぶのです。広い家でもないのに変だと思いました。母は、奥の自室におります。敦は学校です。

「均はこんな病氣なのだよ。五年ぐらいしかもたない。Iさんに言われたのだよ」

そう言うなり主人は声をあげて、胸をかきむしるように転がって泣き出しました。私は声が出ません。うそだ！ あんなに元気なのに。傷が塞がればよくなると信じていたのに。頭の中がぐるぐる回り出しました。他の人はそうであっても均は違う！ 私は心で叫びました。主人があれほど声をあげて、体をえびのように曲げて、どこか痛い所でもあるように泣くのは初めてです。茫然と座って、私はその姿を見つめるだけでした。絶対信じられません。空白の時間が過ぎました。やがて治った主人が起き上がり、私の肩を押さえて、

「しっかりするんだよ。いま一杯泣け。そしてこれからは泣くんじやないよ。バアバアと敦には絶対知らせてはいけない。均にもなるたけ話す時期を延ばさなくては——。お前と俺がしっかりしなくては、均がかわいそうなのだよ」

何も知らない均は、苛々しながらも、もう手術は済んだし、帰ったらレッスンも勉強も始められると、希望を持って私の運ぶ夕飯のおかずを待っているでしょう。

その五年の生命が、一年後には三年ぐらいと、主人から訂正され、二年後に本当の事を打ちあけられましたが、もう驚きませんでした。沢山の照射を受けても元氣を取り戻し、

「僕は負けないよ」

と不屈の魂の固りであるような彼には、奇跡が起こると思えたからです。

N大病院から退院した彼を、フルートの先生のご紹介でT大病院へ連れてゆきました。古い建物が外来です。当時、闘争中でした学生のアジビラがあちこちに張ってある入口でした。先生方は本当に親切でした。カーテンで仕切った簡素な個々の部屋から聞こえる話し声にも、本当に患者の言う事に耳を傾ける姿勢が伺えました。均と顔を見合わせました。

「これが医者なのだよナ」

と彼も今までの不信感が消えて心を開いたようです。担当のN先生は、小柄で気軽に動く方でした。優しい目で、呼吸器かもしれないから念のためにと、胸の断層写真を二十数枚とりました。

病院を出た私どもは、主人と三人で久しぶりに晴々とした気持ちを楽しみながら、均が行きたがっていた神田の藪蕎麦へ寄って帰りました。その夜、熱を出しましたが、車の冷房のせいだったようで、それからは冷房には神経を使うようになりました。

四日後に、その結果を伺いに均と二人で行きました。時間がありませんでしたので、食堂へ行きますと、呼吸器科のK先生が向こうの方で手を上げて、合図をしていらっしやいます。お会いしてま